

News 4

芸文短大 学科ニュース

美術科

▶商品パッケージデザインを九州乳業と共同開発！

九州乳業から商品のパッケージデザイン開発の依頼を受け、専攻科造形専攻ビジュアルデザインコース1年の学生が取り組みました。学生が多くのデザイン案を出しながら、九州乳業の開発担当者と検討を重ね、最終的に日高由夏子さんのデザインに決定しました。デザインは全体がランドセル形をしたユニークなもので、フタを開けると四コマ漫画が描かれているという楽しい仕掛けもあります。漫画の作者は日高さん、小野智子さん、清水志保さんの3人で、ここでも若い学生の感覚が活かされています。



▶音楽科コンサートシリーズ No.54 声楽コース演奏会 ～声の饗宴～

今年から始まった、コース別演奏会の3回目として行われた声楽コースの演奏会は、モーツァルト作曲 歌劇「コシ・ファン・トゥッテ」、独唱4曲、佐藤真作曲の合唱のためのカンタータ「土の歌」といったプログラムで行われました。オペラの舞台の楽しさ、独唱の芸術的な表現力、合唱の圧倒的な声の力など、まさに声と歌の魅力満載の今までにない演奏会となりました。特にオペラでの学生の熱演、独唱に取り組みひたむきな姿勢、合唱の学生ならではの若いエネルギーは、大勢の聴衆を魅了しました。



音楽科

国際文化学科

▶国際文化学科の学生がフランス語学研修に出発しました

国際文化学科の1年生4名と2年生1名の計5名の学生が、1か月間の予定（2月18日～3月22日）で、海外語学研修のために福岡空港から出発しました。研修先は、フランス東南部のアルプスの麓のシャンペリー市あるサヴォワ大学付属語学学校です。

一面の雪景色は、九州出身の学生たちにとっては新鮮なものだったようです。午前中の語学研修に加えて、午後はリュージュなどの課外活動、週末のイタリアやスイスへの遠足など、充実したプログラムが組まれています。短い期間ですが、時間を有効につかって、言葉や異文化を思う存分、吸収してきてほしいと思います。



▶情コミ学生と青年会議所のコラボ劇「こどもに伝えたい！～思いやりの心、人の痛みを理解する心の大切さ～」

2月19日大分県教育会館で、情コミュ学科生と大分青年会議所の方々が協力して劇をしました。「ライオンとねずみ」と「角を失った鬼の兵六」の劇とペットボトルで作った操り人形の実演でした。「地域社会特講」で講演をいただいている「ひとり劇じゅんこ」の福原順子先生にご指導をいただきました。

舞台の背景や人形の製作など準備に大忙しでしたが、さらに演技にも磨きをかけていきました。青年会議所の方々と学生の息を合わせた演技で、子ども達のたくさんの笑顔が会場にあふれました。あたたかい心が伝わった瞬間が確かにそこにありました。



情報コミュニケーション学科

学長コラム

中山 欽吾

「2つの地震に想う」

ニュージーランド語学研修に参加した本学の学生達が、クライストチャーチを襲った大地震に遭遇したのはついこの間のことでした。ところが、この惨禍からまだ間もない3月11日に東北地方の広い範囲で起こった巨大地震は、その規模においても罹災範囲においても比較にならないほど大きく「天災は忘れた頃にやってくる」ということわざ通りの、想像を絶する巨大津波が、海岸に面した多くの町を根こそぎ押し流してしまいました。実は私が30歳代の後半、青森県八戸市で6年間過ごしましたが、美しいリアス式海岸の幾つかの町は訪れたことがあるだけに、ショックは大きいものがあります。

テレビの報道を見て、ふと「稲むら（叢）の火」という話を思い出しました。これは、今の和歌山県広川町で江戸時代にあった実話です。高台にある自宅にいた庄屋の濱口儀兵衛（1820-85）が、地震の後に海水が沖に後退するのを発見して大津波を予見し、収穫したばかりの稲の束に

火をつけたのです。その火事を見た住民が高台に駆けつけた直後に大津波がきて、全員の命が救われたというお話です。この話はラフカディオ・ハーンによって紹介され、世界的にも有名になりました。津波は英語でも「TSUNAMI」なのは、このためだと言われています。

その後、儀兵衛は大変な努力をして住民と一緒に大堤防を作ります。これは被災者に仕事を与えることで救済になったばかりでなく、1946年に発生した昭和の南海地震津波でも立派に役目を果たしたのだそうです。

しかし、今回はかつてのチリ地震津波の教訓から作られた防波堤をも遙かに超す、千年に一度という大地震だったことが明暗を分けたのでしょうか。大自然の力は、時にこのような人知を越えた災害をもたらすという、教訓と言うにはあまりにも大きな爪痕を残して去っていきました。犠牲者に合掌。



似顔絵／小野 智子 (専攻科 造形専攻1年)

連載

美術科 美術専攻2年 福島 壮太

世界一周旅行について

こんにちは。美術科の福島壮太です。第二回及び、最終回になりました僕の世界一周をして感じた話をつたない文章でお送りします。

突然ですがみなさんは「先進国」と「発展途上国」と聞いて、どちらがいい国だとおもいますか？

僕は先進国が好きです。日本に生まれてよかったと思ってしまうかもしれません。日本ではほとんどの人が三食おいしいご飯を食べられます。大学まで行って学べる人はたくさんいるし、家に帰ればたくさんのもので溢れています。もし何か足りないのであれば街に行けばすぐに手に入ります。しかしそんなに物で満たされている生活に満足している人はそれ程多くはないのではないのでしょうか。他の人より良いものを、他の人よりも良い生活を、・・・よりも収入を、・・・よりも成績を。よりもよりの連続。

秀でているものには価値を見いだせず物だけ溢れた社会を本当にあなたが望んだのでしょうか。それが先進国です。

僕は発展途上国が好きです。とくにニカラグアが好きです。ニカラグアはとてもとても貧しい国です。三食どころか日本に比べたら質素な食事。大学なんて夢の場所。家がない人もいました。でもニカラグアは貧しいからこそ、足りないからこそ、人々が助け合い、やさしさや笑顔で溢れていました。僕らがその国を訪れたときには、国をあげてお祭りを開いてくれました。（オルテガ大統領も来てくれました）

しかしながら、ニカラグアでは物がないせいでも人が死んでいます。災害が起これば先進国と比べものにならないくらい、人が死んでいます。それが発展途上国です。

先進国も発展途上国もどちらも良い国です。しかしその肯定と同じくらいに否定もできると僕は思います。

僕らの望む「いい国」は価値観や物に人が塗りつぶされ、人

らしさが減ってしまった国でもなければ、貧しさに家族や友達が奪われる国でもないのです。現在世界は、お互いの良いところと悪いところをきちんと理解しなければならぬときに直面しています。

ある人は言います「先進国の大企業が国に来たせいで職を失った」と。

ある人は言います「人との繋がりが希薄になった」と。ある人は言います「お金があればあの子は死ななかった」と。本当に「いい国」とは、そして「いい世界」とはなんなのか。そんなことを考えながら今日も僕は絵筆を握っているのです。

